

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリストオスか みよ、なんぢはじゅうじかにてしを  
 神 爾 十 字 架 死  
 ほろぼし、とうぞくのためにくえんをひ  
 滅 盗 賊 爲 楽 園 開  
 らき、けいこうぢよのかなしみをなぐさ  
 攜 香 女 悲 慰  
 め、しとになんぢがふくか つして、せか  
 使 徒 爾 復 活 界  
 いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ  
 大 憐 賜 傳  
 させたまえり。

【 十字架叩拜の讃詞 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ  
 主 爾 民 救 爾  
 のぎょうにふくをくだせ、わがくにを  
 業 福 降 我 國  
 つかさどるものにてきにかたしめ、なんぢ  
 司 者 敵 勝 爾  
 のじゅうじかにてなんぢのすまいをまもり  
 十 字 架 爾 住 處 守

た ま え 。  
給

【 十字架叩拜の小讃詞 第7調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い  
光 榮 父 子 聖 神 歸 す 、 い 今

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
何 時 世 世

ほ の お の つ る ぎ は す で に エ デ ム の も ん を ま も ら  
焔 劍 既 門 守

ず 、 け だ し こ れ を し り ぞ く る し え い な る じ ゅ  
蓋 之 卻 至 榮 十

う じ か の き は い た れ り 、 し の は り お よ び  
字 架 木 至 死 刺 及

ぢ ご く の か ち は ほ ろ び た り 、 け だ し な ん  
地 獄 勝 亡 蓋 爾

ぢ は 、 わ が き ゅ う せ い し ゅ よ 、 あ ら わ れ て 、  
吾 救 世 主 現

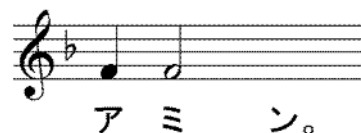
ぢ ご く に あ る も の に よ べ り 、 ま た ら く  
地 獄 在 者 呼 復 樂

え ん に い れ 。  
園 入

司祭) ( 黙誦： 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃<sup>さんえい</sup>榮<sup>ことごと</sup>せられ、<sup>てんぐん</sup> 悉<sup>ふくはい</sup> くの天<sup>ばんぶつ</sup> 軍<sup>む</sup> より伏<sup>ゆう</sup> 拜<sup>ゆう</sup> せられ、萬<sup>ばんぶつ</sup> 物を無<sup>む</sup> より有<sup>ゆう</sup> と  
 なし、人<sup>ひと</sup> を爾<sup>なんぢ</sup> の像<sup>ぞう</sup> と肖<sup>しょう</sup> とに依<sup>よ</sup> りて造<sup>つく</sup> り、爾<sup>なんぢ</sup> が諸<sup>もろもろ</sup> の賜<sup>たまもの</sup> を以<sup>もつ</sup> て之<sup>これ</sup> を飾<sup>かざ</sup> り、  
 願<sup>ねが</sup> う者<sup>もの</sup> に智<sup>ちえ</sup> 慧<sup>めいご</sup> と明<sup>あた</sup> 悟<sup>つみ</sup> とを與<sup>おこな</sup> え、罪<sup>もの</sup> を行<sup>す</sup> う者<sup>もの</sup> を棄<sup>す</sup> てずして、其<sup>その</sup> 救<sup>すくい</sup> の爲<sup>ため</sup> に痛<sup>つう</sup> 悔<sup>かい</sup>   
 を立<sup>た</sup> て、我<sup>われ</sup> 等<sup>らい</sup> 卑<sup>ふとう</sup> しくして不<sup>なんぢ</sup> 當<sup>しよぼく</sup> なる 爾<sup>こ</sup> の諸<sup>とき</sup> 僕<sup>おい</sup> を、此<sup>なんぢ</sup> の時<sup>せい</sup> に於<sup>せい</sup> ても、 爾<sup>せい</sup> が聖<sup>せい</sup> な  
 る祭<sup>さい</sup> 壇<sup>だん</sup> の光<sup>こう</sup> 榮<sup>えい</sup> の前<sup>まえ</sup> に立<sup>た</sup> ちて、爾<sup>なんぢ</sup> に當<sup>とう</sup> 然<sup>ぜん</sup> の伏<sup>ふくはい</sup> 拜<sup>さんえい</sup> 讃<sup>たてまつ</sup> 榮<sup>た</sup> を奉<sup>もの</sup> るに堪<sup>もの</sup> うる者<sup>もの</sup> と  
 なしし主<sup>しゅ</sup> 宰<sup>さい</sup> よ、爾<sup>なんぢ</sup> 親<sup>みづか</sup> ら我<sup>われ</sup> 等<sup>ら</sup> 罪<sup>ざい</sup> 人<sup>にん</sup> の口<sup>くち</sup> よりも聖<sup>せい</sup> 三<sup>さん</sup> の歌<sup>うた</sup> を受<sup>う</sup> け、爾<sup>なんぢ</sup> の仁<sup>じん</sup> 慈<sup>じ</sup> を  
 以<sup>もつ</sup> て我<sup>われ</sup> 等<sup>ら</sup> に臨<sup>のぞ</sup> み、我<sup>われ</sup> 等<sup>ら</sup> に凡<sup>およ</sup> そ自<sup>じゆう</sup> 由<sup>じゆう</sup> と自<sup>じゆう</sup> 由<sup>じゆう</sup> ならざる罪<sup>つみ</sup> を赦<sup>ゆる</sup> し、我<sup>わ</sup> が靈<sup>たましい</sup> と體<sup>からだ</sup> と  
 を聖<sup>せい</sup> にし、我<sup>われ</sup> 等<sup>ら</sup> に生<sup>しょう</sup> 涯<sup>がい</sup> 善<sup>ぜん</sup> 功<sup>こう</sup> を以<sup>もつ</sup> て爾<sup>なんぢ</sup> に務<sup>つと</sup> むるを得<sup>え</sup> せしめ給<sup>たま</sup> え、聖<sup>せい</sup> なる  
 生<sup>しょう</sup> 神<sup>しん</sup> 女<sup>ぢよ</sup> と古<sup>こ</sup> 世<sup>せい</sup> より 爾<sup>なんぢ</sup> の喜<sup>よろこび</sup> を爲<sup>な</sup> しし諸<sup>しよ</sup> 聖<sup>せい</sup> 人<sup>じん</sup> との祈<sup>きとう</sup> 禱<sup>よ</sup> に依<sup>よ</sup> りてなり、 )

司祭) 蓋<sup>けだしわ</sup> 我<sup>かみ</sup> が神<sup>なんぢ</sup> よ、 爾<sup>せい</sup> は聖<sup>せい</sup> なり、我<sup>われ</sup> 等<sup>ら</sup> 光<sup>こう</sup> 榮<sup>えい</sup> を爾<sup>なんぢ</sup> 父<sup>ちち</sup> と子<sup>こ</sup> と聖<sup>せい</sup> 神<sup>しん</sup> に献<sup>けん</sup> ず、今<sup>いま</sup> も何<sup>いつ</sup> 時<sup>いつ</sup> も世<sup>よ</sup> 世<sup>よ</sup>  
 に、



【 聖三祝文に代えて 】

しゅさ い よ 、 わ れ ら あ な んぢ の じゅ うじか  
 主 宰 い よ 、 わ れ ら あ な んぢ の じゅ うじか  
 に ふ く は い し 、 な んぢ の せ い な る  
 伏 拜 い し 、 な んぢ の せ い な る  
 ふ く か つ を さん え い せ ん。 しゅさ い よ 、  
 復 活 讃 榮 い せ ん。 しゅさ い よ 、  
 わ れ ら あ な んぢ の じゅ うじか に ふ く は い  
 我 等 爾 の 十 字 架 伏 拜

し、な んぢのせいなる ふくかつをさん  
爾 聖 復 活 讚

え い せん。しゅさ い よ、われらあ  
榮 主 宰 我 等

な んぢのじゅ うじかに ふくは い し、な  
爾 十 字 架 伏 拜 爾

んぢのせいなる ふくかつをさんえ い せん。  
聖 復 活 讚 榮

こ う え い は ち ち と こ と せい しんにきす、いまも  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に、ア ミ ン。  
何 時 世 世

な んぢのせいなる ふくかつをさんえ い  
爾 聖 復 活 讚 榮

せ ん。

しゅさ い よ、われらあ な んぢのじゅ うじか  
主 宰 我 等 爾 十 字 架

に ふくは い し、な んぢのせいなる  
伏 拜 爾 聖

ふ く かつ をさんえ い せん。  
復 活 讚 榮

司祭) ( 黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、ヘルヴィムざに座ものする者なんぢよ、爾そのくには其國  
 の光こう榮えいの寶座ほうざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何時いつも世よ世よに、 )

【 提綱 (プロキメン) 大齋第三主日 第6調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人に平へい安あん、

誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿えい智ち、

誦經) プロキメン、主しゅよ、爾なんぢの民たみを救すくい、爾なんぢの業ぎょうに福ふくを降くだし給たまえ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業  
 ふくをくだしたまえ。  
 福 降 給

誦經) 主しゅよ、我われ爾なんぢに呼よぶ、我われの防固かためよ、我わが爲ために黙もだす母なかれ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに  
 主 爾 民 救 爾 業  
 ふくをくだしたまえ。  
 福 降 給

誦經) 主しゅよ、爾なんぢの民たみを救すくい、

なんぢのぎょうにふくをくだしたまえ。  
 爾 業 福 降 給

【 使徒經 (アポストロス) 311 端 エウレイ書4章14節~5章6節 】

司祭) 睿えい智ち、

誦經) 聖せい使徒しとパヴエルがエウレイ人じんに達たつする書しょの讀よみ、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、我等に、大なる司祭長、諸天を経たる者、イイスス神の子有るに由りて、

われらうけとめかたまも けだしわれら さいいちょう われら にゆうじゃく たいじゅつ あた  
我等の承認を固く守るべし。蓋我等の司祭長は我等の柔弱を体恤する能わ

ものあら すなわちつみ ほかいっさい こと おい われら ごと ところ もの ゆえ  
ざる者に非ず、乃罪の外一切の事に於て、我等の如く試みられたる者なり。故に

われら きぜん おんちよう ほうぎ つ きようじゅつ う をり かな たすけ おんちよう  
我等毅然として、恩寵の宝座に就くべし、矜恤を受け、機に合う助として、恩寵

え ため けだしおよ ひと うち えら さいいちょう ひと ため しみ ほうじ  
を獲ん為なり。蓋凡そ人の中より選ばるる司祭長は、人の為に神に奉事することを

にん ささげもの まつり つみ ため けん もの むち ものおよ まよ もの あわれ  
任ぜられて、礼物と祭祀とを罪の為に献ずる者にして、無智なる者及び迷う者を憐

よく けだしみづから またにゆうじゃく まと ゆえ かれ たみ ため ごと おのれ ため  
むを能す、蓋自も亦柔弱に纏わる、故に彼は、民の為にするが如く、己の為

またつみ あがな まつり けん かつひとだれ みづか こ そんき う すなわちかみ め  
にも亦罪を贖う祭を献ずべし。且人誰も自ら此の尊貴を受くるなし、乃神に召

もの ごと しか か ごと みづか さいいちょう そんえい もつ  
さるる者なり、アローンの如く然り。是くの如くハリストスも、自ら司祭長の尊榮を以

おのれ き あら すなわちかれ なんぢ われ こ われこんにちなんぢ う い もの  
て、己に帰せしに非ず、乃彼に、爾は我の子、我今日爾を生めりと、言いし者な

またたしょう い ごと なんぢ はん したが さいい な よよ いた  
り、又他章に云えるが如し、爾メルキセデクの班に循いて司祭と為り、世々に返らん

と。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいますのであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、人々のために神に仕える役に任じられた者である。彼は自分自身、弱さを身に負っているので、無知な迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身のためにも、罪についてささげものをしなければならないのである。かつ、だれもこの榮譽ある務を自分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。同様に、キリストもまた、大祭司の榮譽を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなたを生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。また、ほかの箇所でもこう言われている、「あなたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。

\*\*\*\*\*

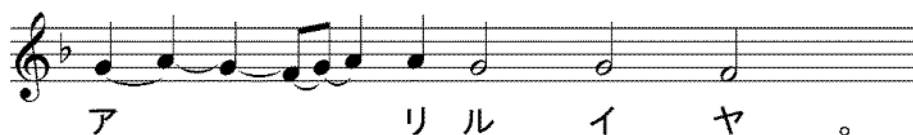
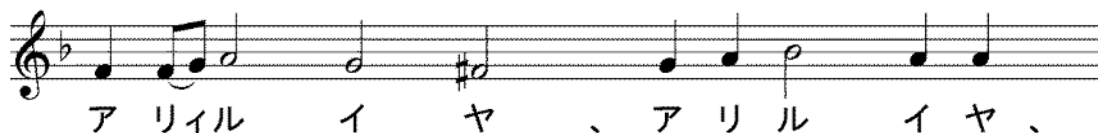
【 アリルイヤ 大齋第三主日 第1調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

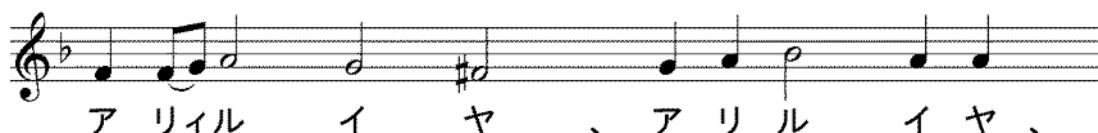
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

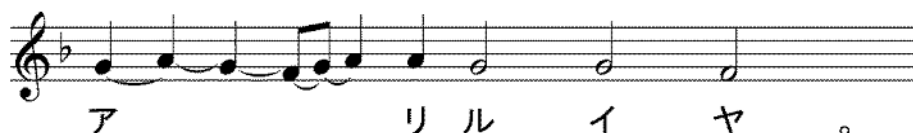
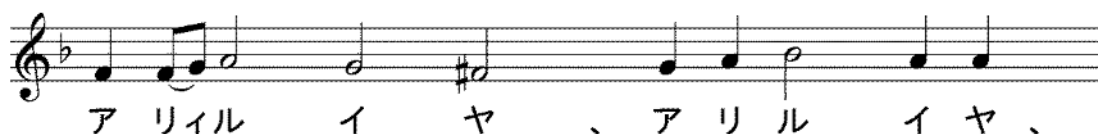
誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>なんぢ いにしえ え なんぢ かい きおく</sup> 爾が古より獲たる爾の會を記憶せよ、



誦經) <sup>かみ わ こせい おう すくい ち なか な</sup> 神、我が古世よりの王は救を地の中に作せり、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

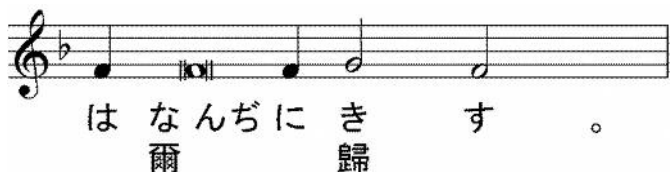
なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん  
 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等 爾と 爾の無原の父と至聖至善にし  
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
 て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書37 端 8 章34~9 章1 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) マルコ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主謂えり、我に従わんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負

いて我に従え。蓋己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の

ために己の生命を喪わん者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈

を損わば、何の益かあらん。抑人何を与えて、其靈の償と為さんや。蓋此

の姦悪の世に於て、我及び我の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖な

る天使等と偕に来らん時彼を耻ぢん。又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立て

る者の中には、未だ死を嘗めずして、神の国が権能を以て来るを見んとする者あり。

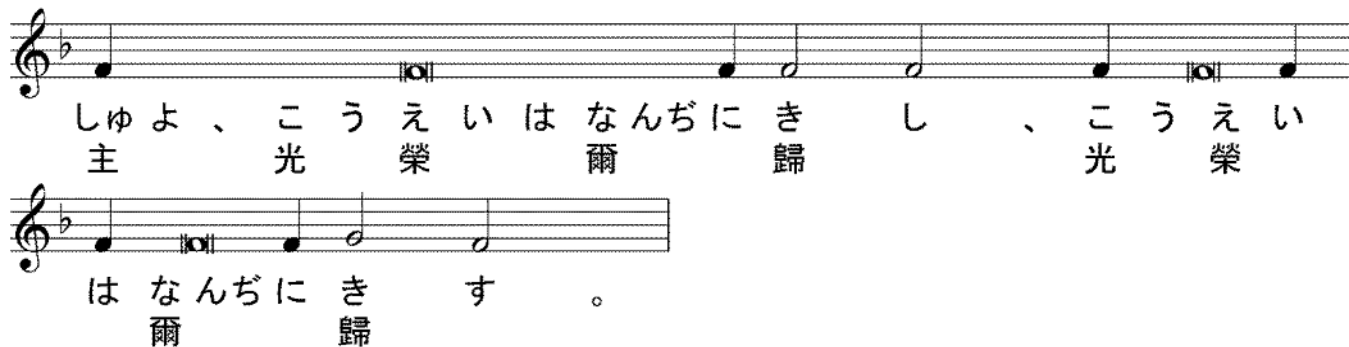
\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 主は彼らに言われた、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのため、また福音のために、自分の命を失う者は、それを救うであろう。人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか。邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう」。また、彼らに



言われた、「よく聞いておくがよい。神の国が力をもって来るのを見るまでは、決して死を味わわない者が、ここに立っている者の中にいる」。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ へ